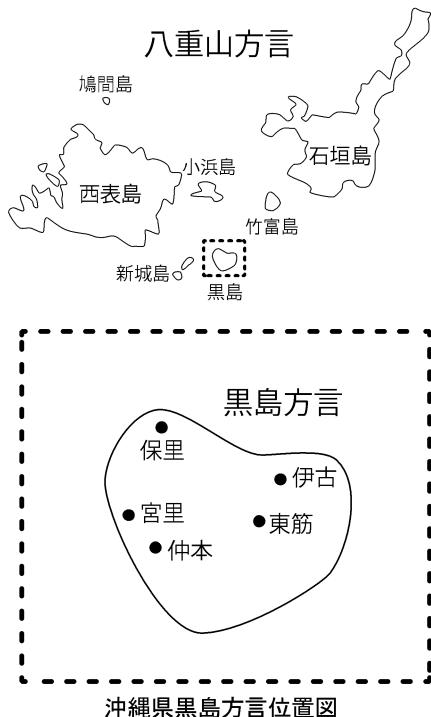


# 沖縄県竹富町黒島方言



**【黒島方言について】** 黒島方言は主に沖縄県八重山郡竹富町黒島において用いられている八重山方言、もしくは八重山語の一種である。以下、本稿では八重山方言とする。

八重山方言は沖縄県南部の石垣市と竹富町で伝統的に使用されている。近隣の与那国町の与那国方言も含めて八重山方言とする場合もあるが（後述のローレンス（2000）参照のこと）、本稿では、与那国方言を除いて考える。八重山方言は、たとえば係助詞 *du* を頻用する点や、サアリ系の形容詞を持つ点など、ある程度共通した特徴も持つ（平山・大島・中本 1967）。しかし、「八重山群島の諸方言では、共通語の一段活用にあたる動詞の活用が、方言によってさまざまな様相を示しているのが特色である」（平山・大島・中本 1967）とされていて、ヴァリエーションが大きいことも示されている。そのため、特定の方言間を除いて、方言間での相互理解度は概して低いようである。ただ、現地の方によると、八重山地方の中心である石垣中心部の方言は、他の地域の人であっても理解はできる、とのことである。

八重山方言内部の系統関係についてはローレンス（2000）が詳しい。そこで述べられている系統関係を次ページにまとめる。

本稿で取り上げる黒島は、石垣島から高速船で30分ほどのところにある、周囲 13km ほどの小さな島である。人口約 200 名に対して牛が約 3,000 頭いる、牧畜の島である。島民のほとんどは民宿などの観光業か畜産業に携わっている。この島で黒島方言は用いられてきたが、現在、伝統的な方言を話すことができるのは、ほぼ 75 歳以上に限られ、多く見積もつても 40 名ほどであろう。他の八重山方言と同様、消滅の危機に瀕した言語である。

黒島方言は 15 子音 (*p, t, k, b, d, g, s, f, h, z, v, c, m, n, r*)、2 半母音 (*j, w*)、5 母音 (*i, e, a, o, u*) を持つ。石垣島の方言などにおいてよく見られる中舌高母音 [i] ではなく、このことが八重山方言のなかで黒島方言を特徴づける 1 つの要素である。また、子音に関しては、語頭において単独でモーラを持つ子音が /m, n, s, f, z, v/ の 6 つあることが特徴的であると言える。

ここで、音韻対応について述べておく。黒島方言においては、古典日本語の *i* と *e* が *i* に対応し、*u* と *o* が *u* に対応することが多い（たとえば、「骨」は *puni*）。黒島方言は上に述べたとおり 5 母音ではあるが、短母音の *e* と *o* を含む語は、単純語においては、少数である。ただ、形態音韻的手続きを経た形式においては、特に珍しくはない。

琉球諸方言の形容詞は、「高い」を例にとると、「名詞形」である「高さ」に「あり」が後続した「高さあり」を起源とする「サアリ系」と、「連用形」の「高く」に「あり」が後続した「高くあり」を起源とする「クアリ系」に分類されるのが一般的であった（仲宗根 1961 など）。また、これは地理的な変異と考えられており、サアリ系は奄美諸島から沖縄本島、多良間島、八重山で見られ、クアリ系は宮古に見られるとされている（仲宗根 1961）。これに従うとすると黒島方言はサアリ系の形容詞を持つはずであるが、実際は平山・大島・中本（1967）でも指摘されているとおり、サアリ系と考えられるものとクアリ系と

考えられるものの両方が使用されている。ただし、いずれも、一般にサアリ系・クアリ系とされているものとは異なる。たとえば、サアリ系と考えられるもの（「普通形容詞」と呼ぶ）は名詞としては使用できないため、すくなくとも共時的にはサアリ系と呼ぶのは不適切である。また、クアリ系と考えられるもの（「比較形容詞」と呼ぶ）も、他方言では古典日本語形容詞のカリ活用と同じような活用を示すが、黒島方言においては、異なる活用を示す。「高い」を意味する語を例にとると、カリ活用の場合、過去形では「たかかった」となるが、黒島方言の比較形容詞の過去形はタカクタとなる。このように、黒島方言の形容詞はこれまでの研究の枠組みではとらえきれない様相を呈している。

黒島は、小さな島であるが、集落間で方言差がある。たとえば、「(雨が) 降る」という動詞の語幹は 東筋(方言ではアースン) では vv であるのに対し、保里(ブリ) では vu である。また、禁止の接尾辞は 東筋では una (hak-una ハクナ「書くな」) であるのに対し、保里では unna (hak-unna ハクンナ) である。下の活用表においては東筋方言の語形を示す。

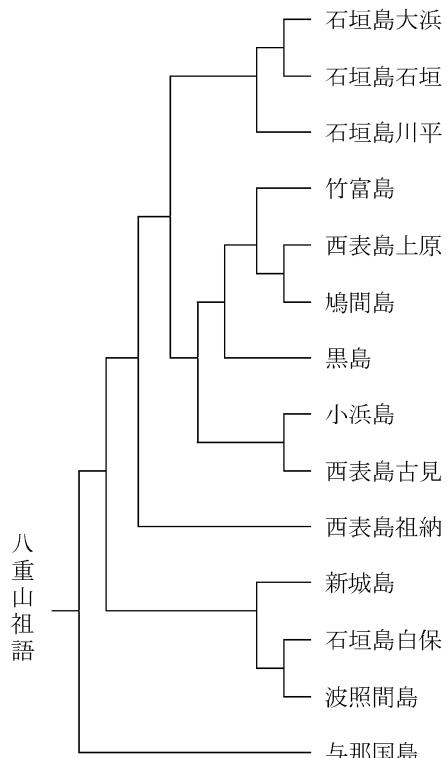
以下、黒島方言に関する先行研究について述べる。文法の概要を示したものとして原田(2017)がある。また、黒島方言の音韻と形態について扱った研究に平山・大島・中本(1967)と内間(2004)があげられる。中松(1976)は、黒島方言の助詞を分類し、意味を記述した。また、野原(2001)も同じく、黒島方言の助詞の記述を行っている。伊豆山(1996)は、母音の順行同化を扱っている。また、伊豆山(1997)は、黒島方言を大きく取り上げながら琉球語諸方言の形容詞の成立を論じている。松森(2016)は、黒島のアクセントを取り上げており、平山・大島・中本(1967)が想定するのとは違う仕組みを提案している。原田(2014)は形容詞語根の分類を行った。また、原田(2016)は、二重有声摩擦音の変異について分析している。方言の資料としては、原田・荻野(2016)に黒島方言による「桃太郎」が収められている。

**【表記について】** 黒島方言の表記にカナは向かない。特に動詞の活用などは語幹末が子音であることも多いため、ローマ字表記を用いるのが適切である。また、子音だけで拍になるものも多く存在することも、

カナ表記が適さない理由である。本稿では理解のためにカナ表記も用いる。その際の注意は以下のとおり(本稿にかかる範囲で述べる)。コーダの/r/は「る」とするが、[f]や[r]で実現する。

「フア」「フィ」「フ」などは無声唇歯摩擦音 [f] で実現する。また、「ヴァ」「ヴ」の子音は有声唇歯摩擦音 [v] で実現する。

**【調査概要】** 本稿で用いる資料は筆者による現地調査によって得られたものである。話者は東筋出身の男性2名である。1933年生まれの方(約半年間沖縄本島で過ごした以外はすべて黒島で過ごしている)と、1939年生まれの方(外住歴なし)である。



ローレンス(2000)による八重山諸方言の系統

## 沖縄県竹富町黒島方言の活用表

《動詞: 多段型、二段型》

		多段一般型 書く	多段r語幹型 踊る	多段特殊型 いる	二段型 出る
終止類	断定非過去	ハク ハクン ハキ	ブドウル ブドゥルン ブドゥリ	ブル ブー ブズ ブン ブリ	ンジル ンジルン ンジ
	断定過去	ハクタ ハクトン ハキ	ブドゥルタ ブドゥルタン ブドゥリ	ブッタ ブッタン ブリ	ンジタ ンジタン ンジ
	命令	ハキ	ブドゥリ	ブリ	ンジリ
	禁止	ハクナ	ブドゥンナ ブドゥルナ	ブンナ	ンジナ
	意志	ハカ	ブドウラ	ブラ	ンズ
	推量	ハク パジ	ブドウル パジ	ブル ハジ	ンジル パジ
接続類	連体非過去	ハク	ブドウル	ブー ブズ	ンジル
	連体過去	ハクタ ハクトル	ブドゥルタ ブドゥッタ ブドゥルタル ブドゥッタル	ブッタ ブッタル	ンジタ ンジタル
	中止	ハキ ハキティ	ブドゥリ ブドゥリティ	ブリ ブリティ	ンジ ンジティ
	仮定	ハクカ	ブドゥルカ ブドゥッカ	ブズカ	ンジカ
	理由	ハキバ	ブドゥリバ	ブリバ	ンジリバ
派生類	否定	ハカン	ブドゥラン	ブラン	ンズン
	丁寧	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)
	使役	ハカス	ブドゥラス	ブ拉斯	ンジッサシリ
	受身	ハカリル	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)
	可能	ハカリル	ブドゥラリル	ブラリル	ンジラリル
	尊敬	ハキ ワール	ブドゥリ ワール	(該当形 欠)	ンジ ワール
	継続	ハキ ブル	ブドゥリ ブル	(該当形 欠)	ンジ ブル
	直前	ハケッス	ブドゥレッス	(該当形 欠)	ンジヤッス
	希望	ハキピサ	ブドゥリビサ	ブリピサ	ンジピサ
	のだ	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)

## 《動詞:来る、する》

		来る	する
終止類	断定非過去	フる フン キー	シール シールン シー
	断定過去	フッタ フッタン キー	シタ シタン シー
	命令	クー	シリ
	禁止	フンナ	シーナ
	意志	ヴァー	スー
	推量	フる パジ	シール パジ
接続類	連体非過去	フる	シール
	連体過去	フッタ フッタル	シタ シタル
	中止	キー キッティ	シー シッティ
	仮定	フッカ フるカ	シッカ
	理由	フリバ	シリバ
派生類	否定	クーン	スーン
	丁寧	(該当形 欠)	(該当形 欠)
	使役	キッサシル	シミル
	受身	(該当形 欠)	シラリル
	可能	キーラリル	シラリル
	尊敬	《ワール》	シー ワール
	継続	キー ブル	シー ブル
	直前	ケーッス	シェーッス
	希望	キビサ	シーピサ
	のだ	(該当形 欠)	(該当形 欠)

## 《形容詞》

		アカ類		グッファ類	
		赤い（普通）	赤い（比較）	重い（普通）	重い（比較）
終止類	断定非過去	アカハ アカハン	アカク	グッファ グッファン	グッファク
	断定過去	アカハタ アカハタン	アカクタ アカクタン	グッファタ グッファタン	グッファクタ グッファクタン
	推量	アカハ パジ	アカク パジ	グッファ パジ	グッファク パジ
接続類	連体非過去	アカハ アカハル	アカクル	グッファ グッファル	グッファクル
	連体過去	アカハタ アカハタル	アカクタ アカクタル	グッファタ グッファタル	グッファクタ グッファクタル
	中止	アカハ アカハティ	アカク アカクティ	グッファ グッファティ	グッファク グッファクティ
	仮定	アカハカ	アカクカ	グッファカ	グッファクカ
	理由	アカハリバ	アカクリバ	グッファリバ	グッファクリバ
派生類	否定	アカハ ナーン	アカク ナーン	グッファ ナーン	グッファク ナーン
	なる	アカハ ナル	アカク ナル	グッファ ナル	グッファク ナル
	丁寧	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)
	のだ	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)

## 《名詞述語》

		学生（だ）
終止類	断定非過去	ガクセー ガクセー（ドウ） アン ガクセー（ドウ） アル
	断定過去	ガクセー（ドウ） アッタン
	推量	ガクセー パジ
接続類	連体非過去	ガクセー（ドウ） アル
	連体過去	ガクセー（ドウ） アッタ ガクセー（ドウ） アッタル
	中止	ガクセー（ドウ） アッティ
	仮定	ガクセー（ドウ） アッカ
	理由	ガクセー（ドウ） アリバ
派生類	否定	ガクセー（ドウ） アラン
	なる	ガクセーニ ナル ガクセーハ ナル
	丁寧	(該当形 欠)
	のだ	(該当形 欠)

## 1. 動詞の活用の特徴

## (1) 活用型と語類の対応

黒島方言の動詞の活用型は、規則型と不規則型が

ある。まず、不規則型にはフる fur 「来る」とシール siiru 「する」が属する。

規則型は、多段型と二段型に分類でき、さらに、

多段型は、多段一般型、多段 r 語幹型、多段特殊型の3つに分類できる。多段 r 語幹型は、その名のとおり、語幹末にrを持つものであり、ブドゥル buduru「踊る」や、キル kir·u「蹴る」などが属する。-ルに後続要素がある場合に、-ルに促音化や撥音化など音声変化が生じる場合があるため、多段一般型とは区別して示す。多段特殊型にはブる bur「いる」、アる ar「ある」が属する。語幹末がrの動詞ではあるが、一部の活用形に、多段 r 語幹型の動詞群とは異なる形態が現れるため別立てした。これらを除いた多段型動詞が、ここで述べる多段一般型動詞であり、ハク hak·u「書く」、ヌム num·u「飲む」などが属する。

次に二段型であるが、本稿で二段型としているものと、本土方言における二段型とは性質が異なるため、その点は注意が必要である。すなわち、本土方言の二段型は、基幹末母音がイ・ウ、または、エ・ウとなり、ウは非過去形や仮定形に現れる。これは、学校文法（古典日本語）の上二段・下二段活用にあたるものであるが、黒島方言で二段型としたものは、意志形と否定形の基幹末母音がウとなり、それ以外の基幹末母音がイとなるというものである。二段型には、バイル ba-iru「驚く」、ビール bi-iru「酔う」などが属する。なお、バイル「驚く」の否定はバウン「驚かない」に、ビール「酔う」の否定は形態素境界を挟む i と u の連続にかかる音韻規則のためにビューン (<bi-un>)「酔わない」となる。

なお、二段型の活用表においては、他方言の報告で用いられている「見る」を採用していない。これは黒島方言における「見る」が例外的なふるまいを示すためである。黒島方言の「見る」は基本的には多段 r 語幹型の活用を示すが、中止形にミーとミリの2種類がある。

多段型と二段型に属する動詞は、a類動詞が多段型、b類動詞が二段型に属する傾向はあるが、上に示したとおり例外も多い。ある動詞がいずれの活用型に属するかは、古典日本語の語幹末音でも、共時的な黒島方言の語幹末音でも判断できない。たとえば、「迎える」を意味する黒島方言のンコー nkoo (nka-u に形態音韻規則がかかったもの) は多段型の活用をとる。また、古典日本語で「着く」をあらわす語は多段型の活用を示すが、黒島方言のシキル

sik·i-ru はそうではない。このように、古典日本語との対応はあくまで傾向である。どの語がどちらに属するかは覚えるしかない。語と型の対応の詳細については、今後の研究に俟つ必要がある。以下に、これまでに分かっている、動詞語幹末尾音のリストを掲載する。

多段型	語幹末音	語例
r	ブドゥル	(踊る)
t	ムトゥ	(持つ)
k	ハク	(書く)
g	バグ	(剥ぐ)
b	トゥブ	(飛ぶ)
s	ピス	(おならする)
z	イズ	(言う)
m	ヌム	(飲む)
n	シヌ	(死ぬ)
a	アラウ	(洗う)
u	ヤクー	(休む)
二段型	語幹末音	語例
k	フキル	(起きる)
t	ウティル	(落ちる)
r	パリル	(晴れる)
z	ンジル	(出る)
i	キール	(消える)
a	バイル	(驚く)
u	クイル	(越える)

## (2) 各活用形の特徴

### 〈断定非過去形〉

表にあげた3形式のうち、ハクン・ンジルなど末尾に「ン」を持つ形は主節にのみあらわれる形であり、他の統語的環境にはあらわれない。ハク・ンジルなど連体非過去形と同形の形は主節末でも連体修飾節でも用いることができる。ハキ・ンジなど中止形と同形の形は主節末でも副詞節でも用いることができる。なお、3番目の形は後述のとおり断定過去でも用いられる。これは、この形が時制の指定はないものの、主節の述部の本動詞としてたちうる、ということである。

・マヌマハラ ティガミユ {ハクン/ハク/  
ハキ}。(今から手紙を書く。)

以上の3つの形が立ちうる統語的環境をまとめる  
と、以下になる。

ハクン：主節のみ

ハク：主節、連体修飾節

ハキ：主節、副詞節

#### 〈断定過去形〉

表にあげた3形式のうち、ハクトン・ンジタンなど「ン」を末尾に持つ形は主節にのみあらわれる形であり、他の統語的環境にはあらわれない。ハクタ・ンジタなど連体過去形と同形の形は主節末でも連体修飾節でも用いることができる。ハキ・ンジなど中止形と同形のものは前述のとおり、主節末では断定非過去、断定過去のいずれでも用いることができる。

- ・キノー ティガミユ ハクトン/ハクタ/ハキ。(昨日手紙を書いた。)

#### 〈命令形〉

多段型動詞は基幹イ段形、二段型動詞は基幹イ段形+リの形をとる。また、命令にはバという終助詞を付す場合が極めて多い。

- ・ティガミユ ハキバ。(手紙を書け。)
- ・クマハラ ンジリバ。(ここから出ろ。)

「来る」の命令の形は特徴的であり、語形そのものが変わる。また、終助詞バが後続した場合は、長母音が短母音になることが多い。

- ・クマハ クー/クーバ/クバ。(こっちへ  
来い。)

のことから、クーは基底では短いクであり、終助詞が後続しない場合、最小語制約がかかり、2モードになるものと考えられる。

#### 〈禁止形〉

多段型動詞は基幹ウ段形+ナ、二段型動詞は基幹イ段形+ナの形をとる。多段型r語幹動詞は、語幹+ナの形をとり、その際、同化が生じて、rがnになることもある。

- ・budur-na ブドゥルナ (踊るな)
- ・budunna ブドゥンナ (踊るな)

なお、上にも述べた通り、集落間で方言差がある。

#### 〈意志形〉

意志は多段型動詞は基幹ア段形、二段型動詞は基幹ウ段形をとる。

- ・ハカ。(書こう。)
- ・クマハラ ンズ。(ここから出よう。)

「来る」の意志の形は極めて特殊でヴァーである。  
ただ、これは\*kura から変化したものと考えられる。

「する」の意志はスーである。

#### 〈推量形〉

連体形式に形式名詞「パジ」が後接した形を推量の意味で用いる。

- ・マヌマハラ ティガミユ ハク パジ。(今か  
ら手紙を書くだろう。)
- ・キノー ティガミユ ハクトル パジ。(昨日  
手紙を書いただろう。)

他にもラーサやアランなど、推測をあらわす形式はある。ラーサはパジと同様、形式名詞であるため前接要素が連体形式をとるが、アランは前接要素として、末尾に「ル」を持つ連体過去形をとることができない。さらに、アランはそれ自体が活用するため、特殊な形式である。

- ・アミヌ ヴッタル ラーサ。(雨が降ったらしい。)
- ・パジマル アラヌン。(始まるんじゃない。)

#### 〈連体非過去形〉

多段型では基幹ウ段形、二段型では基幹イ段形+ルとなる。上にも述べたとおり、連体修飾のみに用いられるわけではなく、主節にも用いられる。

- ・マヌマハラ ハク ムヌ。(今から書くもの。)

#### 〈連体過去形〉

ハクタ・ンジタなど、多段型が基幹ウ段形+タ(r語幹では基幹末母音が脱落)、二段型が基幹イ段形+タとなる形と、ハクトル・ンジタルなど、それらにさらにルが付いた形がある。末尾にルがあるものが連体専用の過去の形式である。もう一方のハクタ、ンジタなどは主節にも、連体修飾節にも用いられる。

- ・キノー ハクトル ティガミ(昨  
日書いた手紙)

連体専用の形は非過去にはない。

#### 〈中止形〉

ハキ・ンジなど基幹イ段形の形と、それにティが付く形がある。2つの形はどちらも中止の際に用いられる。

- ・ティガミユ ハキ/ハキティ、イサナケヘ  
パル。(手紙を書いて、石垣に行く。)

ただし、ティが付かないのは補助動詞をとる場合の本動詞の形として機能したり、上にも述べた

とおり、主節末にも用いられたりする。

- ・ティガミユ ハキ ブル。(手紙を書いている。)
- ・キノー ティガミユ ハキ。(昨日手紙を書いた。)

これに対し、ハキティの方が補助動詞をとったり、主節末にたったりすることはない。

#### 〈仮定形〉

多段型動詞は基幹ウ段形+カ、二段型動詞は基幹イ段形+カの形をとる。

- ・ニシハジヌ フクカ イサナケヘヤ コーカ  
イヤ ナラニバ。(北風が吹けば石垣へは航海ができないので。)
- ・ウリ シッカ ジョートー。(それやつたらいい。)

ただし、r語幹の場合、語幹に直接カが付く。

- ・budur-ka ブドウるカ (踊れば)

これは同化を起こし、ブドウッカとなる場合もある。

#### 〈理由形〉

多段型動詞は基幹イ段形+バ、二段型動詞は基幹イ段形+リバの形をとる。

- ・バー ヌミバ ムティ クー。(私が飲むからもってこい。)

#### 〈否定形〉

多段型動詞は基幹ア段形+ン、二段型動詞は基幹ウ段形+ンの形をとる。

- ・ハカン パジ (書かないだろう)

否定の接尾辞は仮定の接尾辞として aka、過去の接尾辞として ta をとするなど、活用は特殊である。

- ・ハカヌン (書かない)
- ・ハカンタ (書かなかつた)
- ・ハカンタン (書かなかつた)
- ・ハカナカ (書かなければ)
- ・ハカニバ (書かないので)
- ・ハカナ (書かずに)

#### 〈丁寧形〉

黒島方言の動詞には丁寧形に該当する形はみられない。

#### 〈使役形〉

多段型動詞は基幹ア段形+ス、二段型動詞は基幹イ段形+ッサシルの形をとる。

- ・マーニ ハカシタ。(孫に書かせた。)

このように、使役の接尾辞自体は二段型の活用を示

す。

シール siiru「する」の使役は特殊であり、シミルを用いる。

- ・マーニ シュクダイユ シミタ。(孫に宿題をさせた。)

さらに、他動詞ですでに他動性を表す as を含む動詞には im という接尾辞を用いる。

- ・フカス (沸かす)
- ・フカシム (沸かさせる)

二重使役の場合、これと同様の形をとる。

- ・ハク (書く)
- ・ハカス (書かせる)
- ・ハカシム (書かさせる)
- ・ワカツキヌ ティガミユ ハクタ。(若月が手紙を書いた。)
- ・ワカツキニ ティガミユ ハカシタ。(若月に手紙を書かせた。)
- ・カメダヌ ワカツキニ ティガミユ ハカシミタ。(亀田が若月に手紙を書かせた。)

#### 〈受身形〉

多段型動詞は基幹ア段形+リル、二段型動詞は基幹イ段形+ラリルの形をとる。

- ・パナシユ シカリタ。(話を聞かれた。)
- ・バッシラリル。(忘れられる。)

この接尾辞自体は二段型の活用をする。

なお、黒島方言においては厳密に他動詞しか受け身にできない。

#### 〈可能形〉

受身形と同様に、多段型動詞は基幹ア段形+リル、二段型動詞は基幹イ段形+ラリルの形をとる。無論、受身と異なり、自動詞も可能の接尾辞が後接可能である。

- ・シジラリル。(出られる。)

#### 〈尊敬形〉

本動詞のティを末尾に持たないほうの中止形に補助動詞ワールを後続させたものである。「お～になる」にあたる非継続の意、「～ていらっしゃる」にあたる継続の意の両方を表すことができる。

- ・マヌマハラ ヌミ ワール。(今からお飲みになる。)
- ・ハキ ワール。(書いていらっしゃる。)

日本語の「いらっしゃる」同様、「来る」の尊敬

は本動詞としてのワールである。

- ・シマハ ワール。(島へいらっしゃる。)

黒島方言には尊敬の意味を持つ本動詞ウヤス「召し上がる」があるが、これには尊敬の補助動詞ワールが後続しうる。

- ・ウヤシ ワーリュー。(召し上がれ。)

#### 〈継続形〉

本動詞のティを末尾に持たないほうの中止形に補助動詞ブルを後続させたものである。この補助動詞ブルは本動詞ブルと同様の活用を示す。そのため、ブーやブルといった形も持つ。この補助動詞ブルは基本的には進行と結果の継続をあらわす。

- ・ティガミユ ハキ ブル。(手紙を書いている。)
- ・ウヌ ミチエー マガリ ブル。(この道は曲がっている。)
- ・キース トーリ ブル。(木が倒れてしまっている。)

#### 〈直前形〉

直前形は、多段型で語幹が子音で終わるものはessu、母音で終わるものはjassu、二段型は-ijassuという異形態を持つ。意味としては、「直前に話者が直接経験した状況の変化」をあらわす（原田 2015）。この形は管見の限り他の琉球語諸方言や日本本土方言に対応する形が見いだせない。この形は一部の例外を除いて副詞節や連体節には生起しえず、基本的には主節のみに生起する。

- ・マヌマ ハケッス。(今、ちょうど書いた。)
- ・マヌマ バラヤッス。(今、ちょうど笑った。)
- ・マヌマ ンジヤッス。(今、ちょうど出た。)

#### 〈希望形〉

希望の接尾辞は ipisa である。これ自体は形容詞語幹と似たふるまいをする。ただし、主節末で用いられる場合、焦点助詞 du をともなうことが多い。

- ・ハキピサドウ アッタ。(書きたかった。)

#### 〈のだ形〉

黒島方言の動詞にはのだ形に該当する形はみられない。

## 2. 形容詞・名詞述語の活用の特徴

### 【形容詞】

上にも述べたとおり、黒島方言には2つの形容詞

(普通形容詞と比較形容詞) があり、これらは1つの語根から派生される。表で示した語根 aka「赤い」ならば、普通形容詞派生接尾辞 ha を用いて普通形容詞を派生させる (アカハ)。これに対し、比較形容詞は比較形容詞派生接尾辞 ku を用いる (アカク)。これらの形容詞の活用は基本的には同じであるが、普通形容詞の場合、断定非過去の形アカハンがあるが、比較形容詞のアカクンはない (話者によってはアカクンを許容するが、本稿の主な話者の方は許容しない)。このように厳密には形態統語的ふるまいに差がある。意味的には、普通形容詞は無標であると言ってよいが、比較形容詞は比較する際に用いられることが多い。ただし、義務的ではない。

なお、黒島方言の形容詞語根には2種類ある。一方の例はアカ「赤い」であり、普通形容詞の場合ハを、比較形容詞の場合クを付す。これに対し、もう一方の語根類においては、語根と普通形容詞の形が同形であり、比較形容詞の場合、それにクを付す。たとえば、グッファ「重い」という語根であれば、普通形容詞の断定非過去形はそのままグッファであり、比較形容詞の断定非過去形はグッファクである。アカ類には、たとえば、グマ「小さい」、パー「早い」、ゲーラ「貧しい」などが属する。グッファ類には、ヤニヤ「汚い」、ハッラ「軽い」、ピーヤ「寒い」などが属する (詳細は、原田 2014 を参照のこと)。

#### 〈断定非過去形〉

普通形容詞のほうのアカハンは主節専用の形式である。

- ・ウヌ ヤマー タカハン。(この山は高い。)

これに対し、比較形容詞のアカクは主節にも、副詞節にもあらわれる。

- ・ウヌ ヤマー タカク。(この山は(他の山と比べて)高い。)
- ・ウシヌ ネダンヌ タカク ナリ コーバイシヤン イシカク ナリ (牛の値段が高くなつて、購買者も少なくなつて)

このアカクに統語的環境が近い普通形容詞はアカハのほうである。このアカハは主節、副詞節、さらには連体修飾節にも生起しうる。

- ・ウヌ ヤマー タカハ。(この山は高い。)
- ・タカハ ヤマ (高い山)
- ・ウシヌ ネダンヌ タカハ ナリ (牛の値段

が高くなつて)

上にも述べたとおり、比較形容詞には末尾にンのついた形がない。

#### 〈断定過去形〉

末尾にンをもつ形は主節専用であり、他の統語的環境にはあらわれない。非過去の際のような普通形容詞と比較形容詞の非対称性はこの場合、ない。

- ・ウヌ イゾー マーハタン。(この魚はおいしかった。)
- ・ウヌ イゾー マークタン。(この魚は(他の魚に比べて)おいしかった。)

一方、アカハタ、アカクタという形もある。この形は、後述するように、断定過去の場合にも、過去連体の場合にも用いられる。

- ・ウヌ イゾー マーハタ。(この魚はおいしかった。)
- ・ウヌ イゾー マークタ。(この魚は(他の魚に比べて)おいしかった。)

#### 〈推量形〉

動詞と同様、パジを後接させる。パジは形式名詞である。

- ・タカハ パジ。(高いだろう。)
- ・タカク パジ。((より)高いだろう。)

#### 〈連体非過去形〉

上にも述べたが、この箇所は普通形容詞と比較形容詞の非対称性がある。普通形容詞の場合、この環境で用いることができる形が2つ(アカハとアカハル)がある。比較形容詞はこの環境ではアカクルしか用いられない。このアカハルとアカクルは連体修飾の場合にのみ使用可能で、アカハのように主節に用いることはできない。

- ・{マーハル/マーハ} イズ(おいしい魚)
- ・マークル イズ((より)おいしい魚)

#### 〈連体過去形〉

この場合、上に述べたような普通形容詞と比較形容詞の非対称性はない。ただ、アカハタ、アカクタは連体修飾節、主節のいずれにも使用可能であるのに対し、アカハタル、アカクタルは連体修飾節のみに生起する。

- ・{マーハタル/マーハタ} イズ(おいしかった魚)
- ・{マークタル/マークタ} イズ((より)おいしくなつた)

いしかった魚)

#### 〈中止形〉

上の表のこの箇所に挙げた2つの形はどちらも中止の際に用いられる。

- ・ウヌ イゾー {マーハ/マーハティ}、ウヌ イゾー ミザダ。(この魚はおいしくて、この魚はまずい。)
- ・ウヌ イゾー {マーク/マークティ}、ウヌ イゾー ミザダ。(この魚は(より)おいしくて、この魚はまずい。)

ただし、アカハは、これまで述べてきたとおり、主節にも連体修飾節にも生起するし、また、アカクは主節にも生起する。これに対し、アカハティ、アカクティは中止にしか用いられない。

#### 〈仮定形〉

仮定はカという接尾辞をとる。

- ・ウヌ キンヌ タカハカ ハーン。(この着物が高ければ買わない。)
- ・ウヌ キンヌ ハヌ キンキンナ タカクカ ハーン。(この着物があの着物より高ければ買わない。)

#### 〈理由形〉

理由はリバという接尾辞をとる。

- ・ウヌ キンナ タカハリバ ハーン。(この着物は高いから買わない。)
- ・ウヌ キンナ ハヌ キンキンナ タカクリバ ハーン。(この着物があの着物より高いから買わない。)

#### 〈否定形〉

形容詞の否定は動詞とは異なり、統語的な否定をとる。形容詞自体はティを末尾に持たないほうの中止と同じ形をとり、否定形容詞のナーンを後続させる。

- ・ウヌ イゾー マーハ ナーン。(この魚はおいしくない。)
- ・ウヌ イゾー マーク ナーン。(この魚はおいしくない。)

#### 〈なる形〉

否定と同じく、形容詞自体はティを末尾に持たないほうの中止形をとる。

- ・ウヌ ウンナ マーハ ナルタ。(このイモはおいしくなつた。)

- ・ウヌ ウンナ マーク ナルタ。(このイモは  
(より) おいしくなった。)

#### 〈丁寧形〉

黒島方言の形容詞には丁寧形に該当する形はみられない。

#### 〈のだ形〉

黒島方言の形容詞にはのだ形に該当する形はみられない。

#### 【名詞述語】

形容名詞に相当する品詞は黒島方言には存在しない。外来語として形容名詞を取り入れたものとしてヤッカイナ（「厄介な」）とデージナ（「大変な」）はあるが、今のところ確認されているのはこれらの2語のみである。さらに、それぞれ、形容名詞とはまったく異なる性質を持つため、形容名詞に相当するものとして扱うのは不適当である。

まず、ヤッカイナは連体詞であり、ヤッカイという語形は存在しないし、コピュラを後続させることもできない。つまり、ヤッカイナは主節では用いられない。

続いて、デージナであるが、こちらはデージという語形が存在する。しかし、連体修飾の際にデージヌという、他の名詞と同じヌを用いた修飾も可能なのである。つまり、デージは名詞、デージナを連体詞と判断するほうが品詞を増やす必要もなく、合理的であると考える。

以上のような判断から、黒島方言には形容名詞に相当する品詞は存在しないとする。

名詞述語は、主節末にたった場合は、焦点の助詞ドゥをともなうことが多いめ、表にもそのように記した。

#### 〈断定非過去形〉

上の表のこの箇所に挙げた末尾にンをもつ形は主節にのみ生起する。

- ・ウレー ガクセードゥ アン。(彼は学生である。)

ただし、動詞、形容詞と同様に、この形だけがこの環境にたちうるわけではない。まずは非過去の場合コピュラが後続しない名詞だけのことが多い。

- ・ウレー ガクセー。(彼は学生である。)

また、連体非過去の箇所に挙げたものも主節に生

起しうる。

- ・ウレー ガクセードゥ アル。(彼は学生である。)

#### 〈断定過去形〉

上の表のこの箇所に挙げたンを末尾にもつ形は主節にのみ生起する。

- ・ウレー ガクセードゥ アッタン。(彼は学生であった。)

ただし、上と同様に、この形だけがこの環境にたちうるわけではない。末尾のンのない、連体過去の箇所に挙げたものも生起可能である。

- ・ウレー ガクセードゥ アッタ。(彼は学生であった。)

#### 〈推量形〉

動詞、形容詞と同じく、形式名詞のパジを用いる。非過去の場合、名詞に直接パジを後続させる。

- ・ウレー ガクセー パジ。(彼は学生であるだろう。)

一方、過去の場合、コピュラの連体修飾可能な形にパジを後続させる。

- ・ウレー ガクセードゥ アッタ パジ。(彼は学生であつただろう。)

- ・ウレー ガクセードゥ アッタル パジ。(彼は学生であつただろう。)

#### 〈連体非過去形〉

連体非過去の場合、コピュラを用いる。

・ガクセードゥ アル プス (学生である人)  
上にも述べたが、この形は主節にも用いることができる。

- ・ウレー ガクセードゥ アル。(彼は学生である。)

#### 〈連体過去形〉

連体過去の場合は2つの方法がある。

- ・ガクセードゥ {アッタ／アッタル} プス  
(学生であった人)

これらのうち、ルが末尾にあるほうは連体修飾にのみ用いられる。一方、ルが末尾にないほうは主節でも用いられる。

#### 〈中止形〉

中止の場合、コピュラのアッティという形を用いる。

- ・ウレー ガクセードゥ アッティ、ウレー シ

ンシ。(彼は学生で、彼は先生。)

#### 〈仮定形〉

仮定の場合、コピュラのアッカという形を用いる。

- ・アッツア アミドゥ アッカ バラン。(明日  
雨だったら行かない。)

#### 〈理由形〉

理由の場合、コピュラのアリバという形を用いる。

- ・キューヤ アミドゥ アリバ バラン。(今日  
は雨だから行かない。)

#### 〈否定形〉

否定の場合、コピュラのアランという形を用いる。

- ・ウレー ガクセードゥ アラン。(彼は学生で  
ない。)

#### 〈なる形〉

与格助詞ニや向格助詞ハを後続させ、動詞「なる」の補部にする。

- ・{ガクセーニ／ガクセーハ} ナル。(学生に  
なる。)

#### 〈丁寧形〉

黒島方言の名詞述語には丁寧形に該当する形はみられない。

#### 〈のだ形〉

黒島方言の名詞述語にはのだ形に該当する形はみられない。

#### 参考文献

伊豆山敦子 (1996) 「琉球方言の母音調和的傾向」『獨協大学教養諸学研究』31 (1)

伊豆山敦子 (1997) 「琉球方言形容詞成立の史的研究」  
『アジア・アフリカ言語文化研究』54

内間直仁 (2004) 『沖縄県宮古・八重山方言の調査研究—宮古郡下地町来間・八重山郡竹富町黒島方言を中心にして』(課題番号 14510450) 平成 14 年～平成 15 年度科学研究費補助金 研究成果報告書、琉球大学

仲宗根政善 (1961) 「琉球方言概説」東条操監修『方言学講座 第四卷 九州・琉球方言』 東京堂

中松竹雄 (1976) 「八重山方言の文法—竹富町黒島方言の助詞の形態と用法—」『琉球大学教育学部紀要』19 (1)

野原三義 (2001) 「八重山竹富町黒島方言の助詞」沖縄国際大学南島文化研究所 (編) 『八重山、竹富

町調査報告書 (3)』

原田走一郎 (2014) 「南琉球八重山黒島方言における形容詞のサブグループ—接辞 ku が続く形式に注目して—」『阪大日本語研究』26

原田走一郎 (2015) 「南琉球八重山黒島方言におけるテンス・アスペクト・エビデンシャリティー接尾辞 jassu の記述的研究」『阪大日本語研究』27

原田走一郎 (2016) 「南琉球八重山黒島方言における二重有声摩擦音」『日本語学』12 (4)

原田走一郎 (2017) 「南琉球八重山黒島方言の文法」未公刊博士論文 (大阪大学)  
(<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/55692/>)

原田走一郎・荻野千砂子 (2016) 「沖縄県黒島方言の音節一覧・助詞・談話資料」琉球大学国際沖縄研究所 (編) 『文化庁委託事業報告書平成 27 年度危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』

平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』明治書院

松森晶子 (2016) 「八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み—その韻律範疇 PWd と下がり目の出現条件—」『言語研究』150

ローレンス・ウェイン (2000) 「八重山方言の区画について」石垣繁 (編) 『宮良当壮記念論集』ひるぎ社

(原田走一郎)